



大内義隆の菩提寺・龍福寺(山口市)

大友時代を  
生きた人々

鹿毛 敏夫

大内義隆

大内氏は、古代の周防国(山口県)の在庁官人(地方官僚)から守護大名、戦国大名へと成長した武家の一族です。特に、戦国時代の義隆は、失脚して山口に逃れた前将軍足利義隆を擁して、永正5(1508)年に京都に上り、管領代(副将軍代行)として室町幕府の政權を掌握します。そして、父義隆の跡を継いだ義隆の代になると、その版図を最も拡大させて西日本随一の勢力を誇るとともに、大陸貿易の推進と芸能や学問の奨励に努めたことは、よく知られています。

義隆は、山口を訪ねたフランシスコ・ザビエルとも、天文19(50)年と翌年に接見して、ポルトガルのインド総督とゴア司教の親書、望遠鏡、置き時計、眼鏡などを受け取り、ザビエルにはキリスト教布教の許可を与えています。戦国時代の大名家では、閥閥関係(妻方の親類勢力と結ぶ姻戚関係)を強化する政略結婚がよく行われます。周防の大内家と豊後の大友家の間も同様で、大友義鎮(宗麟)の弟の晴英の母親は、大内義隆の娘といわれます。そのため、大内義隆は自身に実子ができない場合の猶子(養子)として、大内家から大友家に嫁いだ姉の子晴英を指名していました。

大内家と大友家の関係は、室町期以来の閥閥関係によって良好な時期もありましたが、基本的には北部九州の地を巡って武力衝突と和睦を繰り返す状況で推移していきます。関係が良好な時期の史料としては、大友氏の水軍家臣団の一員、佐賀関の上野氏に関する記録に、上野統知が「大内義隆に頼り、天文十六(47)年、大内義隆に公使の時、十一歳にて随兵」したとの記述があります。義隆が派遣した同16(47)年度の遣明使節の一員として、大友家家臣の上野統知が中国に同行しているのです。従来、天文年間の遣明船派遣事業は、政權絶頂期の大内義隆による独占だったようにいわれてきましたが、そうではなく、周辺の諸大名からの援助・協力を得て成し遂げられたものといえるでしょう。

版図拡大、西日本随一の勢力に

11月1回掲載

(名古屋学院大学国際文化学部教授)